

富山県

# 南砺市埋蔵文化財分布調査報告2

－福光地域 1 －

2006年度

2007年3月

南砺市教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

富山県

# 南砺市埋蔵文化財分布調査報告2

－福光地域 1 －

2006年度

2007年3月

南 砧 市 教 育 委 員 会  
富山大学人文学部考古学研究室

## 序

南砺市には、国指定の高瀬遺跡や世界遺産にも登録されている相倉・菅沼の合掌造り集落などの貴重な文化財が数多く存在しています。また、遙か太古からの先人の営みも残されており、立野ヶ原台地における旧石器時代の遺跡群をはじめ、市内の各所には縄文時代から中近世までの遺跡が多数確認されています。

このような文化財は、現代に生きる我々が未来へと受け継ぐ財産です。地域で産まれ、育まれてきた文化財は保護・活用することで地域の発展に貢献すると考えております。市内に残された遺跡は市の歴史を語るうえで他に変えることのできない貴重な資料であり、大切な文化遺産です。

市教育委員会では遺跡の把握、保存に努めるために詳細分布調査を行っています。市内の遺跡地図を充実させることは、今後の遺跡の保存と整備、開発行為との調整において欠かせません。

この報告書が今後の学術研究や、郷土の歴史を知るための参考となり、文化財保護に対する理解の一助になりましたら幸いです。

最後に、調査の実施にあたり、多大なご協力とご理解をいただきました地元の方々、関係者の方々に深く感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

南砺市教育委員会  
教育長 植桐角也

## 例　　言

- 1 本書は南砺市教育委員会が国庫補助をうけて実施している、市内遺跡詳細分布調査(2006年度)の調査報告である。
- 2 調査は富山大学人文学部考古学研究室の指導と協力を得て、南砺市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、南砺市福光地域（吉江中・仏造寺・山中・一日市・荒木・竹林・大塚・梅野・天池・吉江野・下野・小林）を対象とした。調査期間は次のとおりである。

平成18年4月15日～4月16日

- 4 調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長林浩明、文化財係文化財保護主事佐藤聖子が調査事務を担当し、文化課長中島寅市が統括した。現地踏査、資料の整理、本書の執筆と編集は、以下の調査担当者、調査補助員が分担して行い、また遺物写真の撮影は南砺市教育委員会嘱託調査員岡山一広が行った。なお、執筆の分担は文末に記した。

調査担当者	富山大学人文学部考古学研究室	教授	黒崎　直
	同	助教授	高橋浩二
	南砺市教育委員会文化課文化財係	文化財保護主事	佐藤聖子
調査補助員	間野　達・小林高太（富山大学人文学部考古学研究室大学院生）		
	高橋彩則（富山大学人文学部考古学研究室研究生）		
	東　良明・伊藤剛士・岡島怜子・久慈美咲・黒木　甫・小林智海・真田泰光		
	徳井恵子・福西慶衣・村上しおり・用田聖実（富山大学人文学部考古学研究室四回生）		
	赤座裕子・小川絵理香・北村志織・小松彩乃・下嶋明日香・竹中庸介・柄郷哲彦		
	松岡治奈・皆川恒子・山崎翔・吉田有里（富山大学人文学部考古学研究室三回生）		
	坂上菜美子・坂田裕之・佐藤雄太・高畠郁美・細丸善弘・増永佑介		
	松木綾子・村上直・横幕眞（富山大学人文学部考古学研究室二回生）		

- 5 現地調査にあたって、福光地域の方々に多大なご協力、ご理解を得た。記して深く感謝したい。
- 6 採集遺物および記録図面は、南砺市教育委員会が保管している。
- 7 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
  - (1)方位は真北である。
  - (2)挿図の遺物実測図の縮尺は1／3、遺物写真図版の縮尺は1／2に統一した。
  - (3)写真図版の遺物番号は遺物実測図の番号と一致する。

## 本文目次

序 文	
例 言	
目 次	
I 位置と環境	1
II 調査の経過	2
第1表 調査区内周知の埋蔵文化財包蔵地	2
III 調査の概要	5
1. 遺跡と探集遺物	5
2. 遺物の散布状況	12
IV まとめ	13
参考文献	14
第2表 調査結果遺跡一覧表	15
図 版	
写真図版	

## 図版目次

第1図 南砺市位置図	
第2図 調査地区割図 (1/200,000)	
第3図 調査地区概要図 (1/25,000)	
第4図 調査結果概要図 (1/7,500)	
第5図 縄文時代の遺物散布状況 (1/10,000)	
第6図 古代の遺物散布状況 (1/10,000)	
第7図 中世の遺物散布状況 (1/10,000)	
第8図 近世の遺物散布状況 (1/10,000)	
第9図 遺物実測図 (1)	
第10図 遺物実測図 (2)	
第11図 遺物実測図 (3)	

## 写真図版

図版 1 遺跡全景 (1)	
図版 2 遺跡全景 (2)	
図版 3 遺跡全景 (3)	
図版 4 調査状況	
図版 5 遺物写真 (1)	
図版 6 遺物写真 (2)	
図版 7 遺物写真 (3)	

## I. 位置と環境

平成16年11月1日、砺波地方所在の八町村であった城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福野町、福光町が合併し南砺市が誕生した。南砺市は富山県の南西部端に位置し、西は石川県金沢市、南は岐阜県飛騨市や白川村に隣接している。山間部は、白山国立公園に指定され、すぐれた自然景観を残しており、庄川や小矢部川の流れる平野部は水田地帯として、また、「散居村」として知られている。面積は668.86平方kmで東西26km、南北39kmに広がっている。

南砺市の地形は東南側に高清水山から袴腰山に連なる高清水山地、西側に医王山・黒澤山を有する山地と、この山地を開析して北流する山田川流域の複合扇状地にわけられる。

旧石器時代の遺跡は、福光・城端両地域の境に位置する立野ヶ原を中心に広がっており、点在する144か所の遺跡は立野ヶ原遺跡群と呼ばれている。めのうや鉄石英が豊富で、それらを利用した石器製作場所がいくつか確認されており、富山県内で最も古い遺跡群の一つとして知られている。

縄文時代に入ると、生活の場は平野部にも広がる。草創期から前期にかけて確認している遺跡数は少ないものの、中期には西原A遺跡や徳成遺跡、後・晚期には後期の指標遺跡である井口遺跡をはじめ安居五百歩遺跡、五瀬遺跡がある。

弥生・古墳時代の遺跡は、確認されている数が少ないが、近年のは場整備事業等により神成遺跡では、弥生終末期から古墳時代にかけての竪穴住居や周溝造構を確認しており、また梅原安丸Ⅲ遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居を確認している。

古代の遺跡には、7世紀、9世紀の竪穴住居跡を約10棟確認した在房遺跡や、9世紀前半の梅原落戸遺跡がある。その他、中世の指標となる大集落として知られる梅原胡摩堂遺跡の東側で、古代8世紀から10世紀にかけての竪穴住居等の遺構を今年度の調査により確認している。またこれら古代の集落に日常食器を供給していたであろう窯に安居・岩木窯跡群がある。

中世には、平野部に大規模な集落が広がる。梅原胡摩堂遺跡をはじめとする田尻遺跡、久戸遺跡などの中世集落跡は南北2km、東西1kmにわたり掘立柱建物、竪穴状土坑、井戸、区画溝などの遺構や、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸などの遺物が多く確認されている。

今年度の対象地域は、吉江中・仏道寺・田中・一日市・荒木・竹林・大塚・梅野・天池・吉江野・下野・小林である。この地域内における主な遺跡には、縄文前期の竪穴住居跡を確認したうずら山遺跡、縄文中・後期の竪穴住居跡、土取りの穴などの遺構がある竹林I遺跡、時宗の念仏道場跡である仏道寺跡、中世城館の荒木城跡がある。

(佐藤聖子)



第1図 南砺市位置図

## II. 調査の経過

平成16年11月の町村合併までに各々の旧町村で確認していた埋蔵文化財包蔵地（以下、「包蔵地」）の数は、590か所あまりである。これらの包蔵地の多くは、古い伝承に基づくもの、開発行為にかかる事前調査によって発見されたものである。町村合併時において、詳細な分布調査が行われていたのは、旧福野町全域、旧城端町域の平野部、旧福光町域において県営は場整備事業等の大規模な開発行為が行われた地域のみであった。未だ包蔵地の詳細が全く確認されていない未調査地区が多く、また包蔵地の保護と開発行為との円滑な調整を計っていくためにも、詳細な分布調査を実施することになった。

分布調査の実施については、旧城端町で平成13年度より7ヶ年にわたって旧町全域を調査する予定にしていたが、町村合併にあたり計画変更を行い、平成18、19年度に調査予定であった旧城端町域の山間部を先送りし、未だ未調査地区が多い南砺市平野部について先行し調査を行うこととした。

南砺市平野部における未調査地区は、福光地域（そのうち、調査実施済みである北山田地区、高宮・小林・殿の一部、祖谷、竹内を除く）、井口地域、井波地域である。このうち、福光地域を4分割、井波地域を2分割し、未調査地区を7分割したうえで今年度より7ヶ年で南砺市平野部の調査を実施することとした（第2図参照）。調査の成果は、年度毎にまとめ公表する予定である。

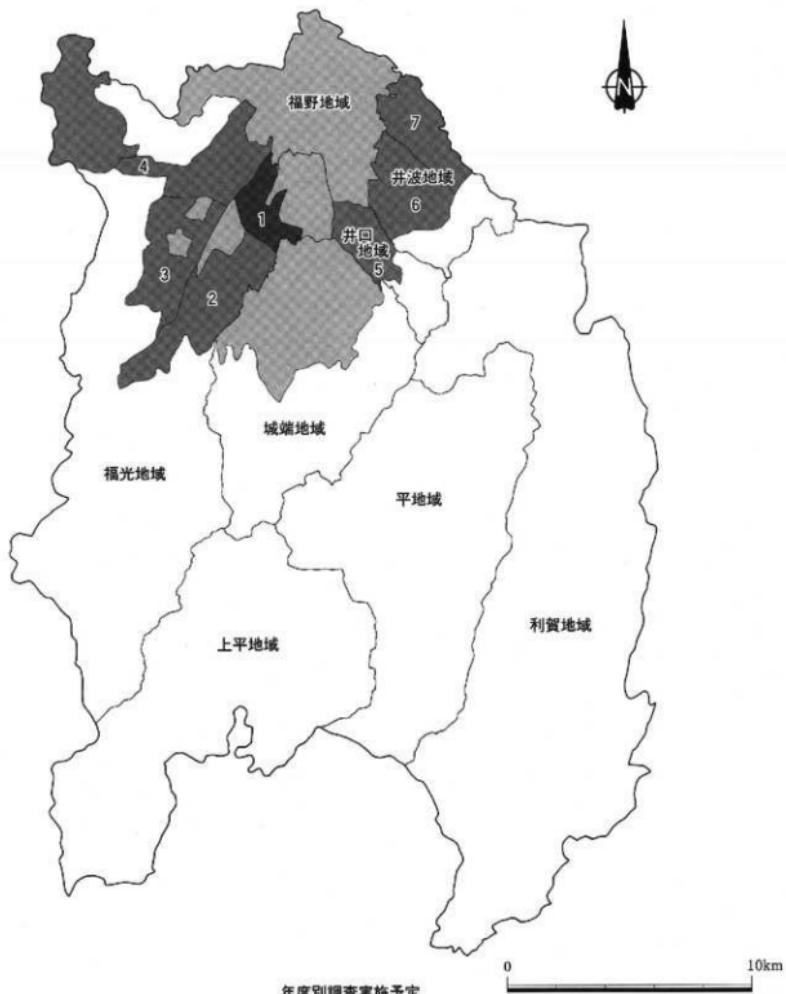
調査は、南砺市が国庫補助を受け、富山大学考古学研究室の指導・協力を得て進めることとした。現地踏査は平成18年4月15日から4月16日の2日間で行い、約40名が参加した。1/5,000の地形図を持参し山畠一枚一枚をくまなく踏査、土器、石器等の遺物を探集し、探集地点を図面に記録した。探集した遺物は、洗浄後探集地点を注記し、実測作業をおこなった。その後、遺物の散布状況、地形、伝承等も加味しつつ、包蔵地の範囲を決定した。

今年度の調査対象地は、旧福光町域の中央から北東部・吉江中・仏道寺・田中・日市・荒木・竹林・大塚・梅野・天池・吉江野・下野・小林である。調査実施までに確認している周知の包蔵地については、下記の第1表のとおりである。

（佐藤聖子）

第1表 調査地区内周知の埋蔵文化財包蔵地

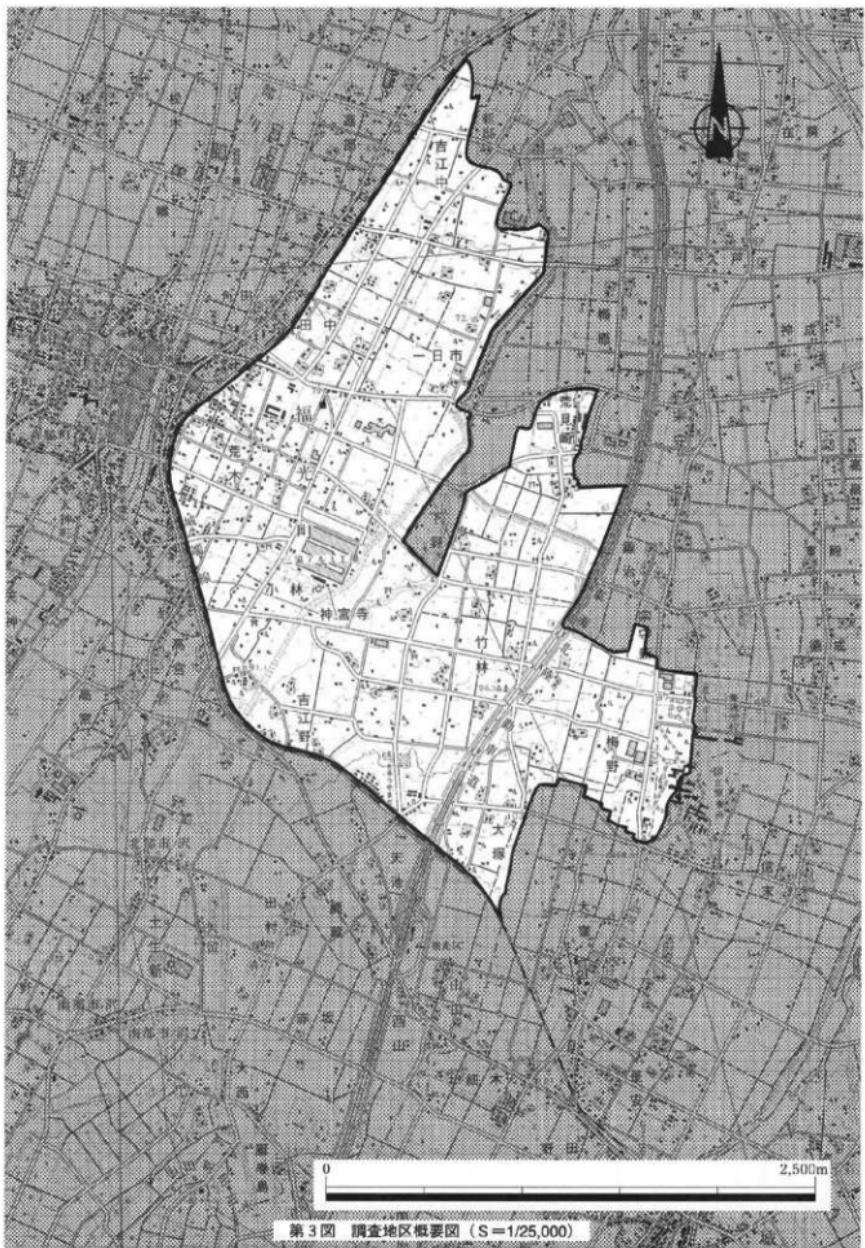
遺跡名	所在地	時代	種別	調査履歴	備考
田中遺跡	田中	縄文、古代、中世	散布地	無	
仏道寺跡	田中	中世	社寺	平成8年度試掘	
竹林I遺跡	竹林	縄文～後期、古代	集落、散布地	昭和53.54年度本調査	堅穴住居跡、多数の土坑を確認
荒木遺跡	荒木	古代、中世	散布地	無	
文殊院跡	荒木	中世、近世	社寺	無	
竹林II遺跡	竹林	縄文	散布地	無	
越中焼窯跡	高宮	近代	近代窯	平成14年試掘	
王城	大塚	不明	祭祀遺構か	無	
神宮古墳	神宮寺	縄文前・後期、古墳中期、中世	塚、散布地	平成8年度試掘	物見やぐらか
THJ-15遺跡	鐵治	不明	不明	昭和63年度試掘	
THJ-16遺跡	竹林	不明	不明	昭和63年度試掘	
THJ-19遺跡	大塚、山田新天池	不明	不明	昭和63年度、平成7年度試掘	
うずら山遺跡	梅原	縄文前期	集落	平成元年度本調査	堅穴住居跡1棟確認
吉江野遺跡	吉江野	縄文	散布地	無	
荒木城跡	荒木	中世	城館	無	



年度別調査実施予定	
番号	地 域 别
1	平成18年度調査実施地域
2	平成19年度調査予定地域
3	平成20年度調査予定地域
4	平成21年度調査予定地域
5	平成22年度調査予定地域
6	平成23年度調査予定地域
7	平成24年度調査予定地域

凡 例	
■	調査完了地域（平成17年度迄）
■	平成18年度調査実施地域
■	平成19年度以降調査予定地域
□	平成25年度以降調査予定地域

第2図 調査地区割図 (S=1/200,000)



第3図 調査地区概要図 ( $S=1/25,000$ )

### III. 調査の概要

#### 1 遺跡と採集遺物

##### (1) <sup>北</sup>吉江中遺跡

採集した遺物は、須恵器54片、珠洲17片、八尾1片、青磁1片、土師器14片（中世4、不明10）、越中瀬戸3片、近世陶器7片、不明遺物6片である。そのうち12点を図示した。

1は須恵器杯蓋のつまみ部である。8～9世紀頃のものと思われる。胎土は密であり、2mm以下の砂粒が混じる。内外面ともにロクロナデ調整を施している。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

2は須恵器壺の口縁部である。8～9世紀頃のものと思われる。口径は約11cmを測る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。内外面ともにロクロナデ調整が施され、外面に自然釉がかかる。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

3は須恵器杯の底部である。8～9世紀頃のものと思われる。底径は約10.5cmを測る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。内外面ともにロクロナデ調整を施す。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

4は須恵器杯の底部である。8～9世紀頃のものと思われる。底径は約8cmを測る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。内外面ともにロクロナデ調整を施す。色調は肌色を呈する。焼成は不良である。

5は須恵器の甕か壺の胴部である。胎土は密であり、2mm以下の砂粒が混じる。内外面ともにタタキ目を施している。色調は外面が青灰色、内面が明青灰色を呈する。焼成は良好である。

6は須恵器の甕か壺の胴部である。胎土は密であり、3mm以下の砂粒が混じる。外面はタタキ目、内面には同心円当て具痕が残る。色調は外面が青灰色、内面が明青灰色を呈する。焼成は良好である。

7は須恵器の甕か壺の胴部である。胎土は密であり、2mm以下の砂粒が混じる。外面はタタキ目、内面には同心円当て具痕が残る。色調は外面が黄灰色、内面が灰色を呈する。焼成は良好である。

8は珠洲の甕か壺の胴部である。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。外面はタタキ目、内面には指頭痕が残る。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

9は珠洲の甕か壺の胴部である。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。外面はタタキ目、内面には指頭痕が残る。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

10は珠洲の甕か壺の胴部である。胎土は密であり、5mm以下の砂粒が混じる。外面はタタキ目、内面には指ナデ痕、指頭痕が残る。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

11は八尾甕の胴部と思われる。胎土は密であり、2mm以下の砂粒が混じる。内面には黒漆の痕跡が認められる。色調は褐灰色を呈する。焼成は良好である。

12は近世の施釉陶器碗の底部である。底径は約5cmを測る。胎土は密である。内外面ともにロクロナデ調整、釉を施す。色調はにぶい黄褐色を呈す。焼成は良好である。  
（佐藤雄太）

##### (2) <sup>北</sup>田中遺跡

採集した遺物は、須恵器10片、珠洲1片、土師器8片（中世1、不明7）、近世陶器1片、不明土器1片である。そのうち4点を図示した。

13は須恵器底部である。底径は約9cmを測る。9世紀後半頃のものと思われる。内外面にロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

14は須恵器杯蓋の口縁端部である。9世紀前半頃のものと思われる。内外面にロクロナデ調整を施す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

15は土師器皿の底部である。底径は約5cmを測る。宮田氏による編年のV期(15世紀後半~16世紀初め)のものと思われる(宮田1997)。外側にロクロナデを施し、内側に指ナデを施す。胎土は密であり、2mm以下の砂粒を含む。色調は橙色を呈する。焼成は良好である。

16は時期不明の土師質の土器である。胎土は粗く、砂粒を含まない。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

(坂田裕之)

### (3) 一日市遺跡

採集した遺物は須恵器34片、珠洲14片、八尾2片、青磁1片、土師器23片(中世11片、不明12片)、越中瀬戸1片、近世陶器30片、染付1片、不明陶器10片、不明磁器1片、不明遺物3片である。そのうち、8点を図示した。

17は須恵器の壺か壺の胴部である。外側にタタキ目、内側に同心円当て具痕が残る。胎土は密であり、2mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

18は須恵器壺の口縁部である。10世紀代のものと思われる。口径は約15cmを測る。内外側にロクロナデ調整を施す。胎土は密である。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

19は珠洲壺の胴部である。外側にタタキ目、内側に指頭痕が残る。外側に自然釉がかかる。胎土は密であり、2mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

20は珠洲すり鉢の胴部である。吉岡氏による編年の珠洲Ⅱ期(13世紀)に属する(吉岡1994、以下珠洲編年はこれに準拠する)。内外側にロクロナデ調整を施す。内側には3cm幅で10条の卸目を施す。胎土は密であり、1mm程度の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

21は珠洲すり鉢の胴部である。珠洲VI~VII期(15世紀後半~16世紀)に属する。外側にロクロナデ調整を施す。内側には3cm幅で10条の卸目を施す。胎土は密である。焼成は良好である。

22は珠洲壺の頸部から肩部の破片である。珠洲Ⅱ期(13世紀)に属する。内外側の頸部にロクロナデ調整が残り、外側の体部にはタタキ目、内側には当て具痕が残る。胎土はやや粗い。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

23は珠洲壺の口縁部である。珠洲Ⅳ期(14世紀)に属する。内外側にロクロナデ調整を施す。口唇部上部には自然釉がかかる。胎土は密である。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

24は八尾壺の胴部と思われる。胎土は密であり、1mm程度の砂粒を含む。内外側にロクロナデ調整を施す。焼成は良好である。

(村上直)

### (4) 仏道寺跡

採集した遺物は、繩文土器1片、須恵器75片、珠洲45片、土師器102片(中世17、不明85)、近世陶磁器70片、不明遺物5片である。そのうち27点を図示した。

25は繩文土器である。半隆起縞文の下に、縞文を施す。中期前葉の新崎式から中葉の天神山式のものであろう。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を多く含む。色調については、内側は灰黄色、外側はにぶい橙色を呈する。焼成は良好である。

26は須恵器の壺か壺の肩部である。外側はタタキ後、上部だけロクロナデ調整によりタタキ目をナデ消した跡がある。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

27は珠洲の壺か壺の肩部である。外側はタタキ後、上部だけロクロナデ調整によりタタキ目をナデ消した跡がある。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は濃い青灰色を呈する。焼成は良好である。

28は須恵器杯蓋のつまみ部である。8世紀前半のものと思われる。胎土は密である。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

29は須恵器杯蓋のつまみ部である。8世紀後半～9世紀初めのものと思われる。胎土は密である。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

30は須恵器の壺か壺の体部である。内外面ともに3cm幅で6条のタタキ目が残る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色である。焼成は良好である。

31は中世土師器皿の底部である。底径は約5cmを測る。胎土は密である。色調は橙色からにぶい橙色を呈する。焼成はやや不良で、軟質である。

32は珠洲壺の底部である。底径は約9cmを測る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

33は珠洲壺の胴部である。外面に1cm幅で5条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1cmの砂礫、1mm～5mmの砂粒を多く含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

34は珠洲壺の胴部である。外面に3cm幅で8条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面灰色を呈する。焼成は良好である。

35は珠洲壺の胴部である。外面に1cm幅で5条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1cmの砂礫、1mm以下の砂粒を含む。色調は外面暗青灰色、内面灰色を呈する。焼成は良好である。

36は珠洲壺の胴部である。外面に3cm幅で9条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

37は珠洲壺の胴部である。外面に2cm幅で6条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

38は珠洲壺の胴部である。外面に3cm幅で9条のタタキ目、内面には明確な當て具痕を残す。胎土はきわめて密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

39は珠洲壺の胴部である。外面に2cm幅で5条のタタキ目を残す。全体に摩滅が激しく、丸みを帯びる。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

40は珠洲の壺か壺の胴部である。時期は珠洲Ⅱ～Ⅲ期（13世紀）に属する。外面に綾杉文状のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は内外面青灰色、断面灰色を呈する。焼成は良好である。

41は珠洲の壺か壺の胴部である。外面に3cm幅で13条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土はきわめて密である。色調は外面暗青灰色、内面灰色を呈する。焼成は良好である。

42は珠洲壺の胴部である。外面に3cm幅で10条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土はきわめて密である。色調は暗青灰色を呈する。焼成は良好である。

43は珠洲壺の肩部である。外面はタタキ後、上部だけクロコナデ調整によりタタキ目をナデ消した跡がある。内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

45は珠洲壺の胴部である。外面に1cm幅で3条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

46は珠洲壺の胴部である。外面に2cm幅で6条のタタキ目、内面には當て具痕を残す。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

47は珠洲すり鉢の口縁部である。口径は約22cmを測る。時期は珠洲Ⅰ～Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）に属する。卸し口はみられない。内外面がロクロナデ調整されている。胎土は密である。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

48は珠洲すり鉢の口縁部である。口径は約35cmを測る。時期は珠洲Ⅴ期（15世紀前半）に属する。内外面がロクロナデ調整されている。卸口がみられる。胎土は密である。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

49は越中瀬戸壺の底部である。底径は約3.5cmを測る。内面と外面端に浅黄橙色の釉を施す。右回転の割りだし輪高台である。調整はロクロナデである。胎土は密である。露胎の色調はにぶい黄橙色を呈する。焼成は良好である。

50は近世陶器壺の底部である。底径は約9cmを測る。外面に茶褐色を基本とする縞状の釉を施す。調整はロクロナデである。胎土はきわめて密である。色調は褐灰色を呈する。焼成は良好である。

51は近世陶器の底部である。器種は不明である。底径は約5cmを測る。内面端に褐色の釉が残る。割りだし輪高台で、高台付近は無釉である。調整はロクロナデである。胎土は密であり、1mm以下の白色粒を含む。色調は、内外面は黄橙色、断面は灰色である。焼成は良好である。

52は越中瀬戸壺の底部である。底径は約6cmを測る。内面に略赤褐色の釉を施す。割りだし輪高台で、高台付近は無釉である。調整はロクロナデである。胎土は密である。色調は、内外面は灰黄色、断面は灰色を呈する。焼成は良好である。

53は越中瀬戸壺の底部である。底径は約5cmを測る。高台は割りだし高台である。調整はロクロナデである。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。色調は、内外面はにぶい黄褐色、断面は灰色を呈する。焼成は良好である。

54は越中瀬戸壺の底部である。底径は約4cmを測る。外面は黒色、内面は明緑灰色の釉を施す。高台付近は無釉である。調整はロクロナデである。胎土はきわめて密である。色調は、断面灰色を呈する。焼成は良好である。

55は近世陶器壺の底部である。内外面に明黄褐色の釉を施す。調整はロクロナデである。胎土は密である。色調は、断面灰黄色を呈する。焼成は良好である。

56は近世陶器の口縁部である。器種は不明である。口径は約22cmを測る。外面上に鉄釉を施す。胎土は密である。断面に粘土の繊ぎ目がみえる。調整はロクロナデである。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

57は近世陶器の口縁部である。器種は不明である。口径は約17cmを測る。内外面は白色の釉を施す。口縁部の先端を折り曲げていて、先端の部分は釉が剥げている。調整はロクロナデである。胎土は密である。色調は、断面橙色を呈する。焼成は良好である。

58は近世陶器すり鉢の口縁部である。口径は約18cmを測る。内外面に褐色の釉を施す。卸口がみられ、口縁部先端は外反する。調整はロクロナデである。胎土は密である。色調は、断面褐灰色を呈する。焼成は良好である。

59は越中瀬戸すり鉢の底部である。底径は約15cmを測る。外面の一部にオリーブ褐色の釉が残る。高台は張りつけ高台である。調整はロクロナデである。胎土はきわめて密である。色調は、断面灰色を呈する。焼成は良好である。

60は近世陶器壺の口縁部である。口径は約11cmを測る。内外面に淡黄色を基本とする縞状の釉を施す。所々釉が剥がれて素地が見える。調整はロクロナデである。胎土はきわめて密である。色調は、断面灰色を呈する。焼成は良好である。

61は越中瀬戸椀の底部である。底径は約5cmを測る。内外面に黒色の釉を施す。削りだし輪高台で、高台付近は無釉である。見込み部分に別の釉の流れが見られる。調整はロクロナデである。胎土はきわめて密である。色調は、断面淡灰褐色を呈する。焼成は良好である。

62は近世陶器椀の底部である。底径は約5cmを測る。内外面に明オリーブ灰色の釉を施す。外面に暗オリーブ灰色の模様が描かれている。高台は張りつけ高台である。調整はロクロナデである。胎土は密である。色調は、断面灰白色を呈する。焼成は良好である。

(高畠郁美、横幕 真)

#### (5) 竹林I遺跡

探集した遺物は縄文土器28片、石器1点である。そのうち9点を図示した。

63は縄文土器深鉢の胴部である。中期前葉後半の新崎式に属するものであろう。外面に半截竹管による半隆起線を施す。胎土には砂礫が混じり、色調は外面がにぶい褐色、内面は橙色を呈する。焼成は良好である。

64は縄文土器の胴部破片である。中期前葉後半の新崎式に属するものであろう。外面に半截竹管による半隆起線を施す。胎土には砂礫を含み、色調は外面が浅黄橙色、内面は橙色を呈す。焼成は良好である。

65は縄文土器の胴部破片である。中期前葉前半の新保式Ⅲ期に属するものであろう。外面に半截竹管による浅い半隆起線を施す。胎土には砂礫を含み、色調は内外面橙色を呈す。焼成は良好である。

66は縄文土器深鉢の胴部で、時期不明である。外面に横方向の縄目紋を施す。胎土には砂礫を含み、色調は外面が褐色、内面は浅黄橙色を呈す。焼成は良好である。

67は縄文土器深鉢の胴部で、時期不明である。外面は風化しているが、一部に縄目紋が残る。胎土は砂礫を含み、色調は外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈す。焼成は良好である。

68は縄文土器深鉢の胴部で、時期不明である。外面は風化しているが一部に縄目紋が残る。胎土は砂礫を含み、色調は外面が橙色、内面はにぶい褐色を呈す。焼成は良好である。

69は縄文土器の胴部破片で、時期不明である。外面は無紋である。胎土は砂礫を含み、色調は外面が褐色、内面は橙色である。焼成は良好である。

70は縄文土器深鉢の胴部で、時期不明である。外面は風化している。胎土は砂礫を含み、色調は内外面がにぶい黄褐色を呈す。焼成は良好である。

71は打製石斧である。長さ12.0cm、最大幅7.5cm、基部幅5.0cm、刃部幅6.4cm、重さ186.0gであり、石材は砂岩と思われる。円礫を打割った素材を使用していて、全体的に加工痕は少ない。中央両側縁部は大きく抉れていて、形態的には分銅形に属するが、上下両端の調整が為されていないため、分類することができない。

(坂上菜美子、横幕 真)

#### (6) 荒木遺跡

探集した遺物は、須恵器4片、珠洲8片、越中瀬戸1片、近世陶器1片である。そのうち2点を図示した。

72は須恵器杯の底部である。底径は約7cmを測る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒を含む。内外ともロクロナデ調整を施す。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。

73は珠洲すり鉢の口縁部である。吉岡編年珠洲VI期（15世紀後半～16世紀前半）に属する。口径は約28cmを測る。内外面ともにロクロナデ調整を施す。口縁部内面には4cm幅で8条の波状文が確認できる。胎土は密で3mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

(細丸善弘)

### (7) 荒木Ⅱ遺跡

採集した遺物は、須恵器14片、土師器5片、珠洲11片、越中瀬戸2片、近世陶器2片、不明1片である。そのうち10点を図示した。

74は須恵器杯蓋である。口径は約10cmを測り、8世紀代のものである。外内面ともにロクロナデ調整が見られる。内面の縁に自然釉がかかる。胎土は密であり、色調は褐灰色を呈する。焼成は良好である。

75は須恵器杯の底部である。底径は約10cmを測る。8～9世紀のものと思われる。貼り付け高台である。胎土は密で3mm程度の砂粒を含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

76は須恵器壺の底部である。底径は9.8cmを測り、8～9世紀のものと思われる。削りだし高台である。胎土は密で、1mm程度の砂粒を含む。色調は暗灰黄色を呈する。外面にはヘラケズリが施され、内面には自然釉がかかる。焼成は良好である。

77は須恵器杯の底部である。底径は約15cmを測る。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。外内面ともにロクロナデ調整を施す。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

78は須恵器の甕か壺である。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。外面に格子状のタタキ目を施し、内面は同心円状の当て具痕が見られる。色調は、外面は茶褐色、内面は灰色を呈する。焼成は良好である。

第10圖の44は珠洲壺の胴部である。珠洲Ⅲ～Ⅳ期(13～14世紀)に属するものと思われる。胎土は密で、1mm程度の砂粒を含む。外内面は青灰色、断面は灰色を呈する。外面は綾杉タタキ目が施され、内面は指頭痕が見られる。焼成は良好である。

79は珠洲壺の胴部である。胎土は密で1mm程度の砂粒を含む。外面は平行タタキ目が施され、内面は同心円状の指頭痕が見られる。色調は灰白色を呈する。焼成は良好である。

80は珠洲壺の胴部である。胎土は密である。外面はタタキ目が施され、内面は同心円状の指頭痕が見られる。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

81は珠洲壺の胴部である。胎土は密で1mm程度の砂粒を含む。外面は平行タタキ目が施され、内面は指頭痕が見られる。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

82は陶器のすり鉢底部である。底径は12.8cmを測る。底面に回転糸切り痕が残る。左回転の御目が3cm幅で11条認められる。胎土は密で5mm程度の砂礫を含む。色調は、外面はにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色、断面は暗赤褐色を呈する。焼成は良好である。

(松木綾子)

### (8) 文殊院跡

採集した遺物は、越中瀬戸1片である。

(坂上菜美子)

### (9) 竹林Ⅱ遺跡

採集した遺物は、須恵器1片、越中瀬戸2片、近世陶器3片である。そのうち4点を図示した。

83は須恵器壺の胴部である。外面に擬格子文の平行タタキ目がみられる。内面には同心円当て具痕が残る。胎土は密であり、1mm以下の砂粒が混じる。色調は灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

84は施釉陶器鉢の口縁部である。口径は約21cmを測る。内外面にオリーブ灰色の釉を施すが、口縁の頂部は無釉である。胎土は密で、1mm以下の砂粒が混じる。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

85は越中瀬戸すり鉢の胴部である。内外面に鏡釉を施し、ロクロナデされる。また内面に御目が施される。胎土は密で、1mm以下の砂粒が混じる。色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

86は施釉陶器の口縁部である。口径は約26cmを測る。外面には黒褐色の釉を、内面には灰オリーブ色と暗灰黄色と褐色の釉を縞状に施す。外面はロクロナデされる。胎土は密で、灰色を呈する。焼成は良好である。

(増永佑介)

(10) 竹林東島遺跡

採集した遺物は、近世土器2片、近世陶磁器2片である。

(高畠郁美)

(11) 越中焼窯跡

採集した遺物は、越中焼77片である。

(坂上菜美子)

(12) 王塚

今回の調査において硬貨1枚を採集し、これを図示した。87は一銭硬貨であり、大正六年鋳造である。

(坂田裕之)

(13) 梅野遺跡

今回の調査において採集した遺物は近世陶器5片である。そのうち2点を図示した。

88は近世陶器の口縁部である。口径は約26.5cmを測る。調整は内外面ともにロクロナデ調整を施す。内外面ともに釉は施されていない。胎土は密で、色調は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

89は近世陶器の底部である。底径は約5cmを測る。内面に灰色の釉を施す。外面には上部から下部へ流れる白色の釉が認められ、高台内部には黄緑色の釉を施す。胎土は密で、砂粒を含まない。素地は灰色を呈する。焼成は良好である。

(坂田裕之)

(14) 小林遺跡

今回の調査において採集した遺物は珠洲1片、越中瀬戸2片、施釉陶器2片、土師器1片である。そのうち3点を図示した。

90は珠洲窯の胴部である。外面にタタキ目を施し、内面はロクロナデ調整を施す。胎土は密で1mm以下の砂粒を含む。色調は外面が黒褐色、内面は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

91は施釉陶器の底部である。底径は約6cmを測る。内外面にロクロナデ調整を施す。内外面にオリーブ灰色の釉を施し、内面に白色の釉が流れる。胎土は密で、素地は外面が褐色、内面は暗褐色を呈す。焼成は良好である。

92は施釉陶器の口縁部である。口径は約14cmを測る。外面に茶褐色と黄褐色の釉、内面に黒色の釉を施す。口縁部先端は無釉でロクロナデ調整が施されている。胎土は密で、素地は赤褐色を呈す。焼成は良好である。

(坂上菜美子)

(15) 神宮寺塚、(16) THJ-15遺跡、(17) THJ-16遺跡、(18) THJ-19遺跡、(19) うずら山遺跡、  
(20) 吉江野遺跡、(21) 荒木城跡

今回の調査において遺物は採集されなかった。

(坂上菜美子、高畠郁美、細丸善弘、松木綾子)

## その他の採集遺物

遺跡範囲外の採集品についても、将来的な遺跡発見の可能性を高めるため、すべての採集地点を記録している。そのうち、主なものについて示す。

93は近世骨壺の胸部である。内外面にロクロナデ調整を施す。胎土は密で、1mm程度の砂粒を含む。色調はにぶい橙を呈し、焼成は良好である。

94は珠洲壺の胸部である。外面にはタタキ目が施され、内部には当て具痕が残る。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

95は越中瀬戸すり鉢の胸部である。外面上半部に暗褐色の釉を施す。胎土は密で、1mm以下の砂粒を含む。素地の内面は暗赤褐色、断面、外面下半部はにぶい橙を呈する。焼成は良好である。（高畠郁美、細丸善弘）

## 2 遺物の散布状況

今回の調査で採集した遺物の総数は、771片である。これらの散布状況を時期別に大別、集計した。散布状況は国土座標をもとに1辺200mの方眼を設けて示した。

各時期ごとの総量は、縄文30、古代198、中世145、近世184、近代78、時期不明136片である。

### （1）縄文時代の遺物散布状況（第5図）

縄文時代の遺物は、土器29片、打製石斧1点を4地区から採集した。

ほぼ竹林I遺跡から採集された。竹林I遺跡は、これまでに発掘調査が行われており、縄文時代中期の聚落跡が発見されている。今回の調査においても縄文時代中期前葉にあたる新保式や新崎式の土器が採集された。また周辺には、竹林II、うずら山、東殿、徳成遺跡など縄文時代の遺跡が分布している。調査区の南方には立野ヶ原台地があり、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡群が広がる。

### （2）古代の遺物散布状況（第6図）

古代の遺物は、須恵器198片を48地区から採集した。

調査区北部の吉江中遺跡、一日市遺跡、仏道寺遺跡周辺に集中する。調査区北方にある安房、岩木の丘陵には須恵器窯が営まれており、その生産活動を維持、管理する集団の存在が推察できる。

### （3）中世の遺物散布状況（第7図）

中世の遺物は、珠洲焼97片、八尾焼3片、青磁2片、土師器43片を47地区から採集した。

古代に引き続き、吉江中遺跡、一日市遺跡、仏道寺遺跡周辺に集中する。これらの遺跡の大井川をはさんで東側には梅原胡摩堂遺跡をはじめとした梅原遺跡群が広がっている。梅原胡摩堂遺跡、梅原加賀坊遺跡、梅原安丸遺跡などからは、12世紀中頃から17世紀の大集落跡が発見されている。この一帯では、中世には医王山信仰を拠り所にし、医王山の麓に集落が形成されていった。今回遺物を採集することのできた調査区北部においても開発が進み、集落が形成されていたと推測される。

### （4）近世の遺物散布状況（第8図）

近世の遺物は、越中瀬戸42片、陶磁器138片、染付4片を57地区から採集した。

調査区全域に分布するようになる。中世以前には遺物の分布が見られなかった場所にまで分布範囲が拡大し

ており、近世以降の開発の進展を示しているものと考えられる。

(小林高太)

## IV まとめ

今回の分布調査は、南砺市の西部を占める旧福光町において、その市街地から旧福野町と接する北東部にかけての地区を対象に行った。この地区は、標高約65~100mを測る南砺台地北端部にあって、小矢部川と山田川とに挟まれた地域に位置し、ほぼ中央には小河川の大井川が北流している。

本地区的周辺には、縄文時代の遺跡が比較的多く分布するのに対して、弥生、古墳時代の遺跡はほとんど認められない。古代には、砺波郡が設置され、また平野部（砺波平野）には東大寺領莊園が形成されていくが、旧福光町域において確認された古代の遺跡は未だ少なく、条里遺構についても未検出であることからすれば、平野部に比べ遅れて開発が進行していったと考えられる。一方、中世には、大井川と山田川に挟まれた段丘上に、梅原胡摩堂をはじめとした遺跡が複数成立し、大規模な遺跡群を形成するようになる。この一帯は、後三条天皇の御願寺円宗寺の所領である石黒莊の内の山田郷にあたり、莊園支配の拠点であったと推定される。

さて、地区内には從来17ヶ所の遺跡が周知されていたが、今回あらたに6ヶ所で遺跡を発見した（第2表）。また、17ヶ所のうち4ヶ所については遺跡の範囲が拡張することになった。以下にその概略を示す。

新規発見の吉江中遺跡は、古代から近世にかけての遺跡で、50点を越える須恵器片が採集されたことはとくに注目される。一日市遺跡も、同じく古代から近世のものであり、ここでも30点以上の須恵器片が採集されている。荒木Ⅱ遺跡についても、古代から近世にかけての遺跡と考えることができる。また、竹林東島遺跡と梅野遺跡は、近世の遺跡とすることができる。小林遺跡については、近世の遺跡で、中世にまで遡る可能性をもつと推測するに留める。

次に、範囲の拡張した遺跡について述べる。まず、仏道寺遺跡は、南へ約600m拡張することとなった。従来中世の社寺跡とされていたが、古代から近世に及ぶ多数の遺物が採集されたことにより、遺跡の評価をあらためめる必要がある。とくに、75点の須恵器片、45点の珠洲片の存在は注目される。なお、縄文土器が1片採集されている。縄文、古代、中世の田中遺跡と古代、中世の荒木遺跡は、北へそれぞれ約500m、約100m拡張することになった。両遺跡からは、少数だが新たに近世の遺物が採集された。また、竹林Ⅱ遺跡は、南へ約500m拡張した。縄文土器の散布地として知られるが、今回は近世を中心とする遺物が採集された。

ところで、はじめに述べたように、大井川の東には中世の集落が群在している。このことを踏まえ、あらためて遺物の散布状況を見ることにしよう（第4図）。珠洲をはじめとする中世の遺物は、本地区内の北半、すなわち荒木遺跡および荒木Ⅱ遺跡から吉江中遺跡までの間の南北約2.5km、東西約1.2kmの範囲に広く分布している。本地区内の南半では、中世の遺物はほとんど認められない。そして、このことが、中世における土地利用の状況を示唆すると捉えるならば、大井川の西においてもほぼ同時期に開発が進んでいったことが推測される。

さらに重要なことは、中世と同様な遺物の散布状況が、古代に遡って認められるということである。とくに、吉江中、仏道寺、一日市の各遺跡には古代の須恵器が比較的集中して分布する箇所が認められる。砺波平野の状況に比べれば開発の進展度は相対的に低いと考えられるが、古代における拠点的な開発、居住の可能性が指摘できるようになった点は大きな成果と言えるだろう。

なお、近世には、本地区内の北半だけでなく南半へも遺物の分布が拡大し、開発、居住がさらに発展していったことがうかがわれる。

以上、分布調査の成果を概述し、古代以降の開発について推測を行ったが、本地区内で本格的な発掘が実施された2遺跡（竹林Ⅰ遺跡、うずら山遺跡、いずれも縄文時代）を除いては、大半が遺物散布地としての取り

扱いであり、とりもなおさず遺跡の規模や時期、性格などについては不明確な点が多い。また、未確認の遺跡も存在することと思われる。今後は、さらなる遺跡の把握を行うとともに、これら遺跡の保護に務めていきたい。

(高橋浩二)

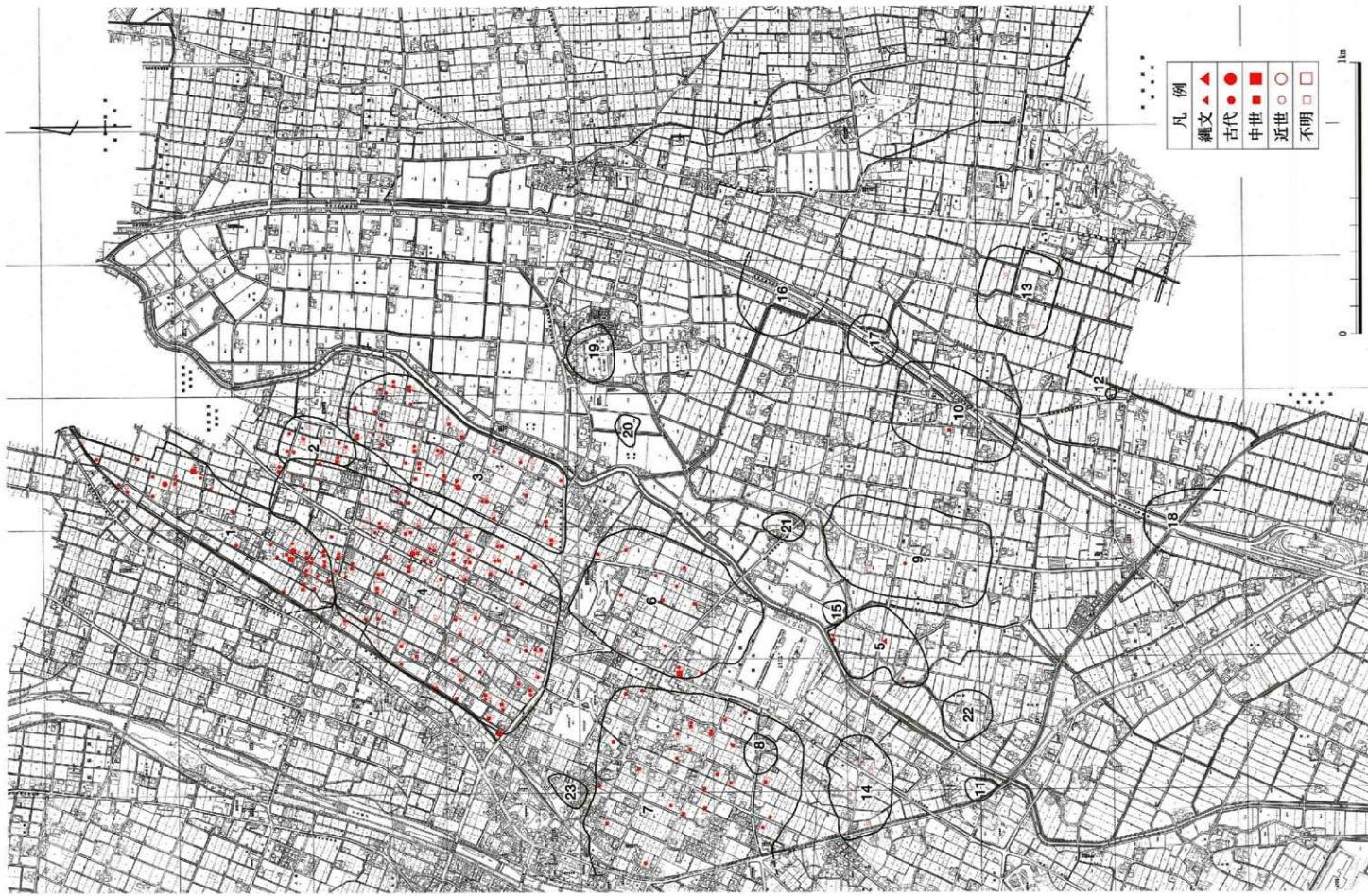
## 参考文献

- 相賀徹夫1977『世界陶磁全集』3日本中世、小学館  
上田秀大1982「14~16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究」No.2、日本貿易陶磁研究会  
金田章裕1993「医王山麓の平野における中世景観」「医王は語る」医王山文化調査委員会  
上市町教育委員会2005『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』  
九州近世陶磁学会2004『第14回九州近世陶磁学会資料 受容層の違いによる九州陶磁の様相』  
後藤茂樹編1979『世界陶磁全集』2日本古代、小学館  
齊藤孝正、後藤健一編1995『須恵器集成図録』第3巻東日本編I、雄山閣出版  
珠洲市立珠洲焼博物館1989『珠洲の名陶』  
立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1987『立山町埋蔵文化財分布調査報告II』1986年度、立山町文化財調査報告書第2冊  
(財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所1996『富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II－』  
富山大学考古学研究室1989『越中上末窯』富山大学考古学研究報告第3冊  
中村浩編1995『須恵器集成図録』第1巻近畿編I、雄山閣出版  
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団1986『石川県能都町真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書－』  
氷見市教育委員会・富山大学考古学研究室1999『氷見市埋蔵文化財分布調査報告VI』1998年度、氷見市埋蔵文化財調査報告第27冊  
宮田進一1988「越中瀬戸の窯資料(1)」「大境」第12号、富山考古学会  
宮田進一1997「越中国における土師器の編年」「中・近世の北陸考古学が語る社会史」桂書房

第2表 調査結果遺跡一覧表

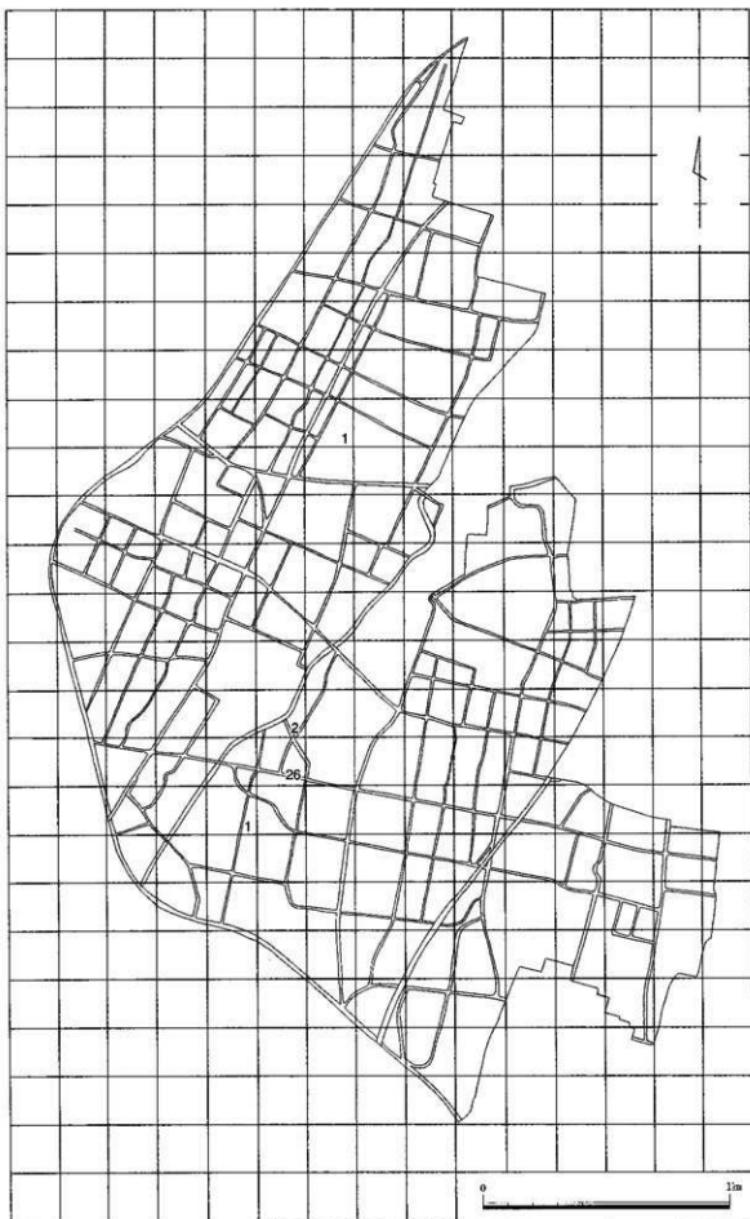
遺跡名	確認別	所在地	時代	種別	調査履歴	備考
田中遺跡	周知	田中	縄文、古代、中世	散布地	無	遺跡範囲拡張
仏道寺跡	周知	田中	中世	社寺	平成8年度試掘	遺跡範囲拡張
竹林I遺跡	周知	竹林	縄文中～後期 古代	集落、散布地	昭和53、54年度 本調査	堅穴住居跡、多数の土坑を確認
荒木遺跡	周知	荒木	古代、中世	散布地	無	遺跡範囲拡張
文殊院跡	周知	荒木	中世、近世	社寺	無	
竹林II遺跡	周知	竹林	縄文	散布地	無	遺跡範囲拡張
越中燒窯跡	周知	高宮	近代	近代窯	平成14年試掘	
王塚	周知	大塚	不明	祭祀遺構か	無	
神宮寺塚	周知	神宮寺	縄文前・後期 古墳中期・中世	塚、散布地	平成8年度試掘	物見やぐらか
THJ-15遺跡	周知	鍛治	不明	不明	昭和63年度試掘	
THJ-16遺跡	周知	竹林	不明	不明	昭和63年度試掘	
THJ-19遺跡	周知	大塚、山田新 天池	不明	不明	昭和63年度、 平成7年度試掘	
うずら山遺跡	周知	梅原	縄文前期	集落	平成元年度本調査	堅穴住居跡1棟確認
吉江野遺跡	周知	吉江野	縄文	散布地	無	
荒木城跡	周知	荒木	中世	城館	無	
吉江中遺跡	新規	吉江中	古代、中世、近世	散布地		
一日市遺跡	新規	一日市	古代、中世、近世	散布地		
荒木II遺跡	新規	荒木	古代、中世、近世	散布地		
竹林東島遺跡	新規	竹林	近世	散布地		
梅野遺跡	新規	梅野	近世	散布地		
小林遺跡	新規	小林	中世、近世	散布地		



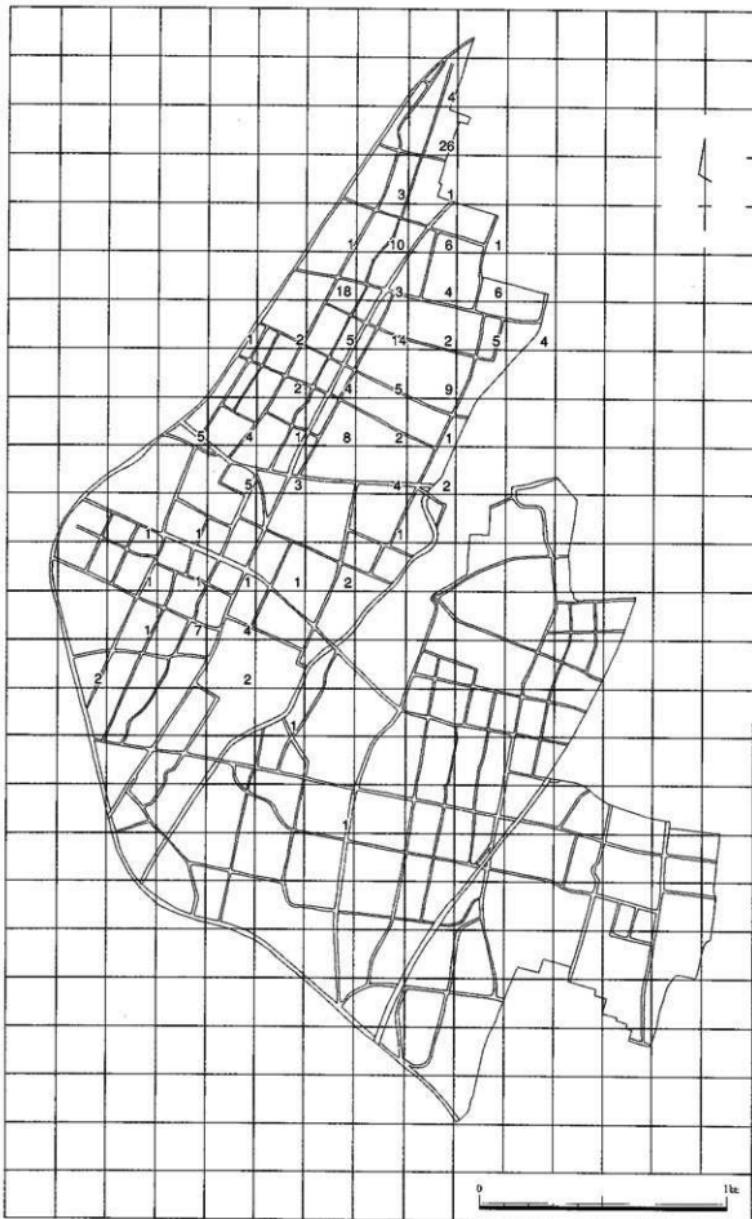


第4図 調査結果概要図 (S=1/7,500)

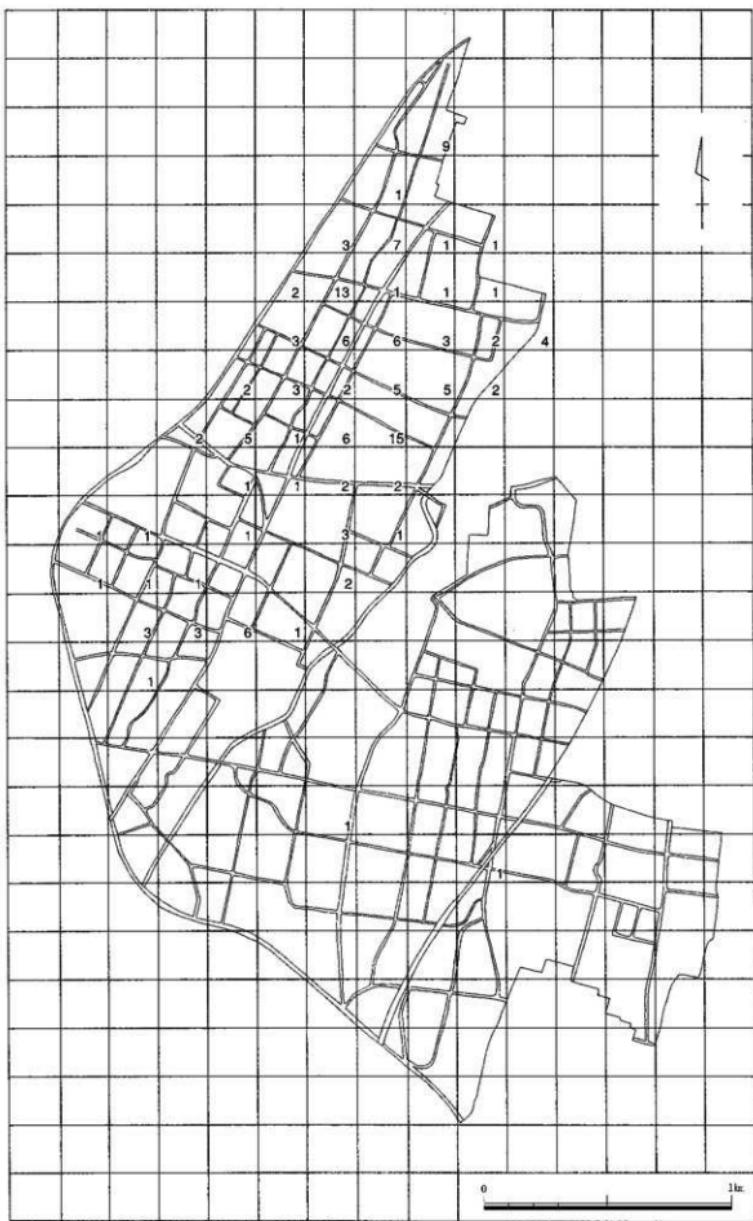
1. 古江中道跡
2. H中道跡
3. 一日山道跡
4. 佐道寺跡
5. 竹林 I 道跡
6. 水木 II 道跡
7. 水木 III 道跡
8. 文殊院跡
9. 竹林 II 道跡
10. 竹林 III 道跡
11. 鶴中堀跡
12. 王塚
13. 横野道跡
14. 小瀬道跡
15. 神宮寺跡
16. THJ-15道跡
17. THJ-16道跡
18. THJ-17道跡
19. THJ-18道跡
20. 横野出村 I 道跡
21. 横野出村 II 道跡
22. 吉野町道跡
23. 芦木城跡



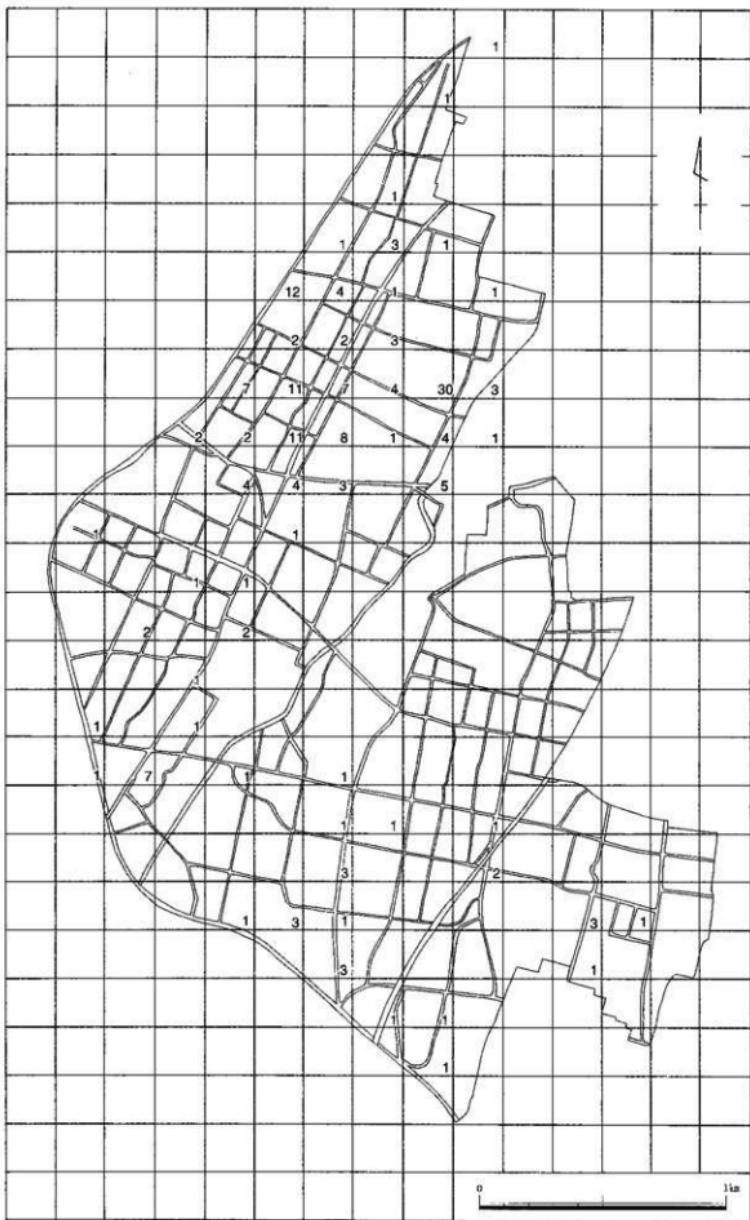
第5図 縄文時代の遺物散布状況 ( $S = 1/10,000$ )



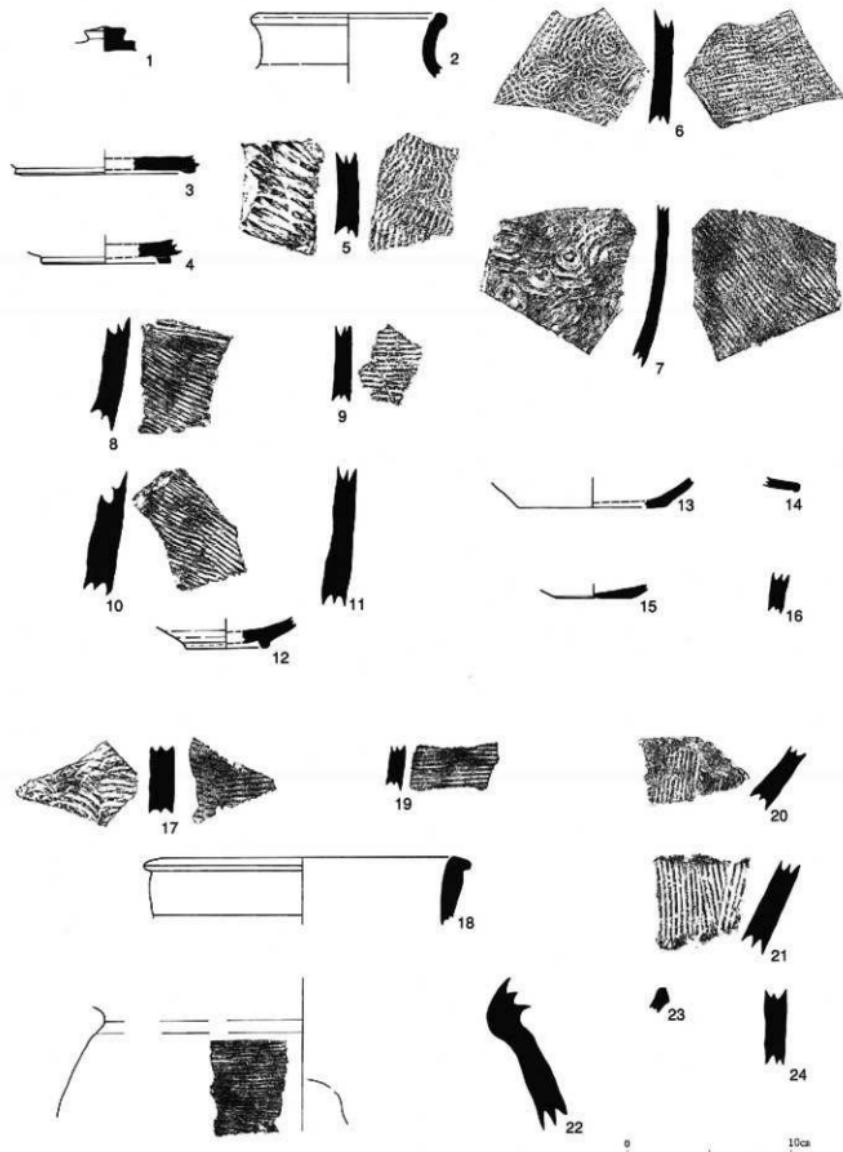
第6図 古代の遺物散布状況 ( $S=1/10,000$ )



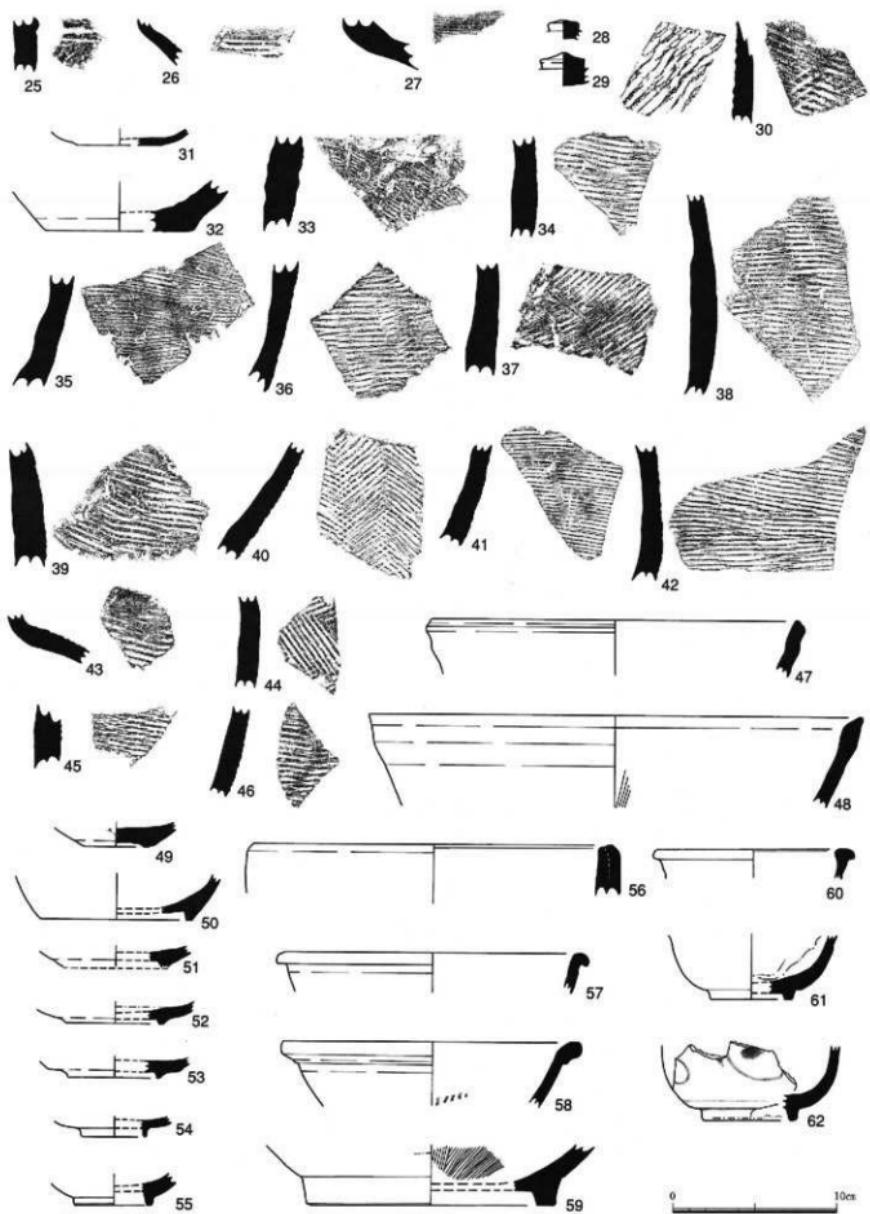
第7図 中世の遺物散布状況 ( $S=1/10,000$ )



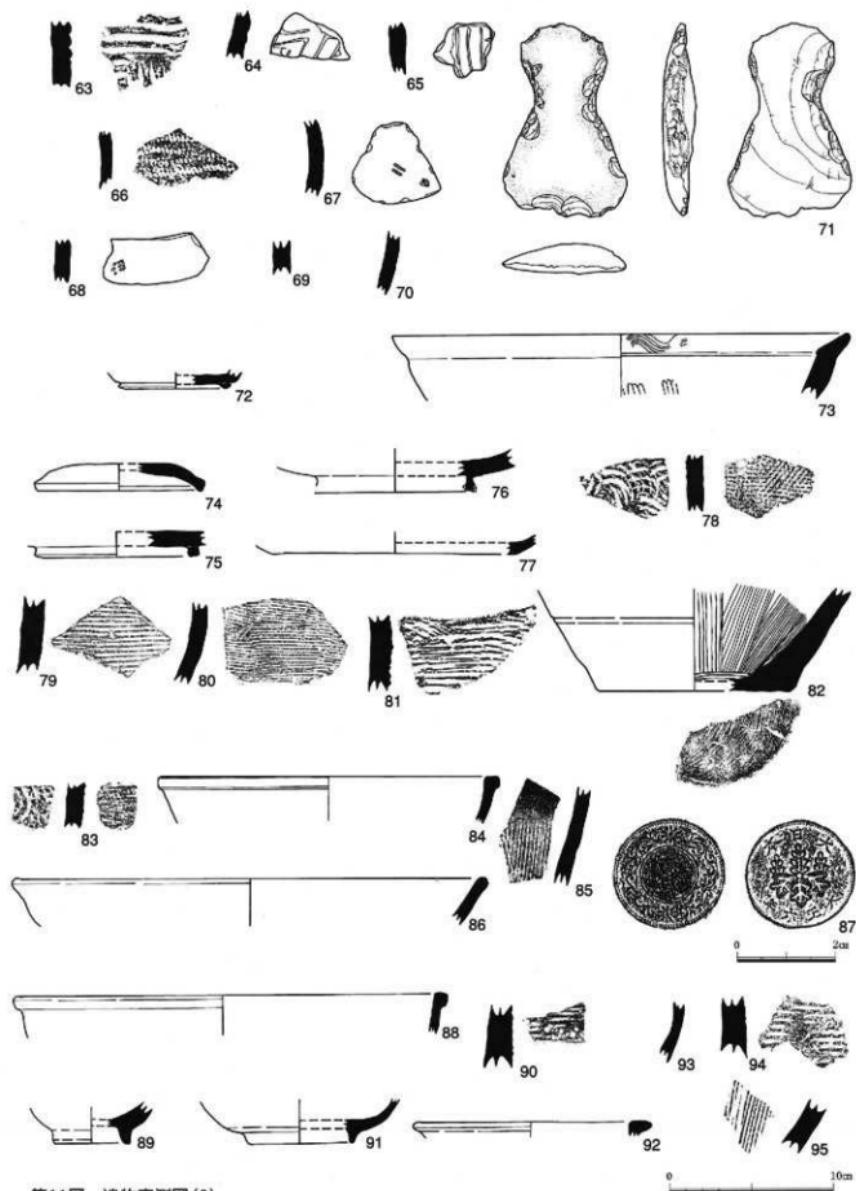
第8図 近世の遺物散布状況 ( $S = 1/10,000$ )



第9図 遺物実測図(1)  
1~12 吉江中遺跡 13~16 田中遺跡 17~24 一日市遺跡 (S=1/3)



第10図 遺物実測図(2)  
25~43、45~62 仏道寺遺跡 44 荒木Ⅱ遺跡 ( $S=1/3$ )



第11図 遺物実測図(3)

63~71 竹林遺跡 72、73 荒木遺跡 74~82 荒木Ⅱ遺跡 83~86 竹林Ⅱ遺跡 87 王塚  
88、89 梅野遺跡 90~92 小林遺跡 93~95 遺跡範囲外出土品 (63~86、88~95 S=1/3 87 S=1/1)





1



2



3



4



5



6

図版1 遺跡全景(1)

- |          |          |          |
|----------|----------|----------|
| 1. 吉江中遺跡 | 2. 田中遺跡  | 3. 一日市遺跡 |
| 4. 仏道寺跡  | 5. 竹林I遺跡 | 6. 荒木遺跡  |



1



2



3



4



5



6

図版2 遺跡全景(2)

- |           |         |          |
|-----------|---------|----------|
| 1. 荒木Ⅱ遺跡  | 2. 文殊院跡 | 3. 竹林Ⅲ遺跡 |
| 4. 竹林東島遺跡 | 5. 王塚   | 6. 梅野遺跡  |



1



2



3



4



5



6

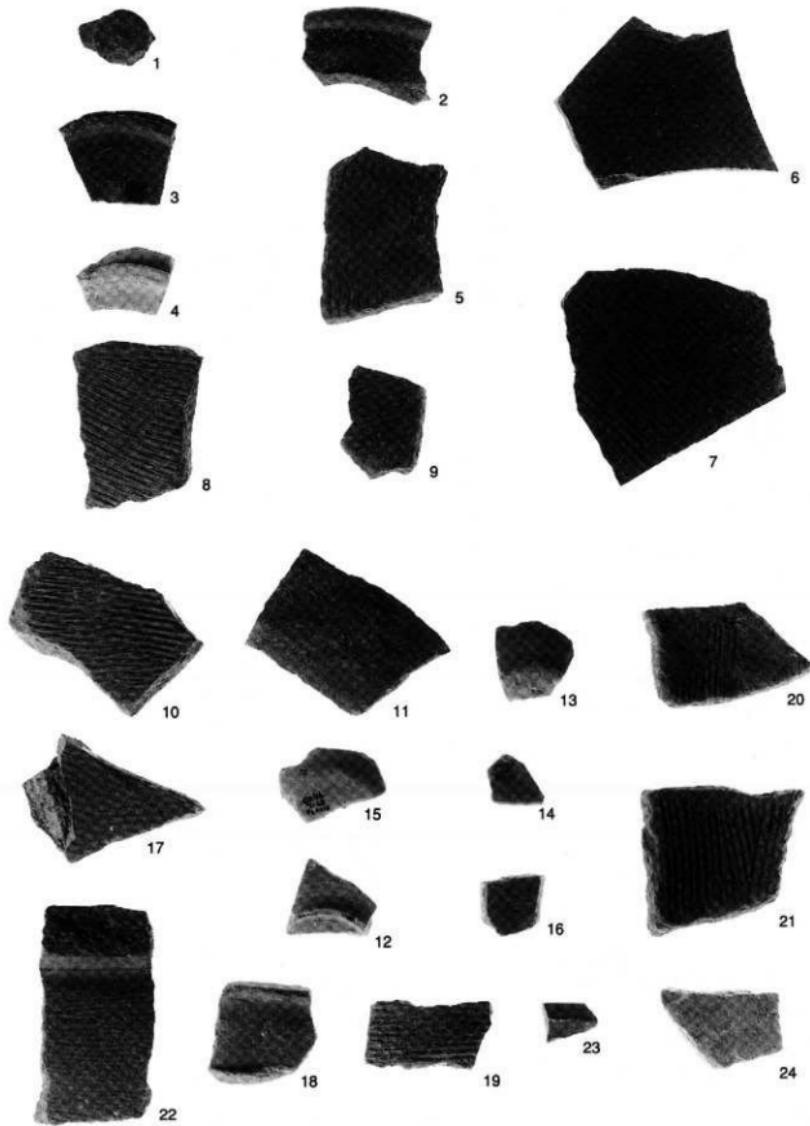
図版3 遺跡全景(3)

1. 小林遺跡  
2. 神宮寺塚  
4. うずら山遺跡  
5. 梅原出村南遺跡

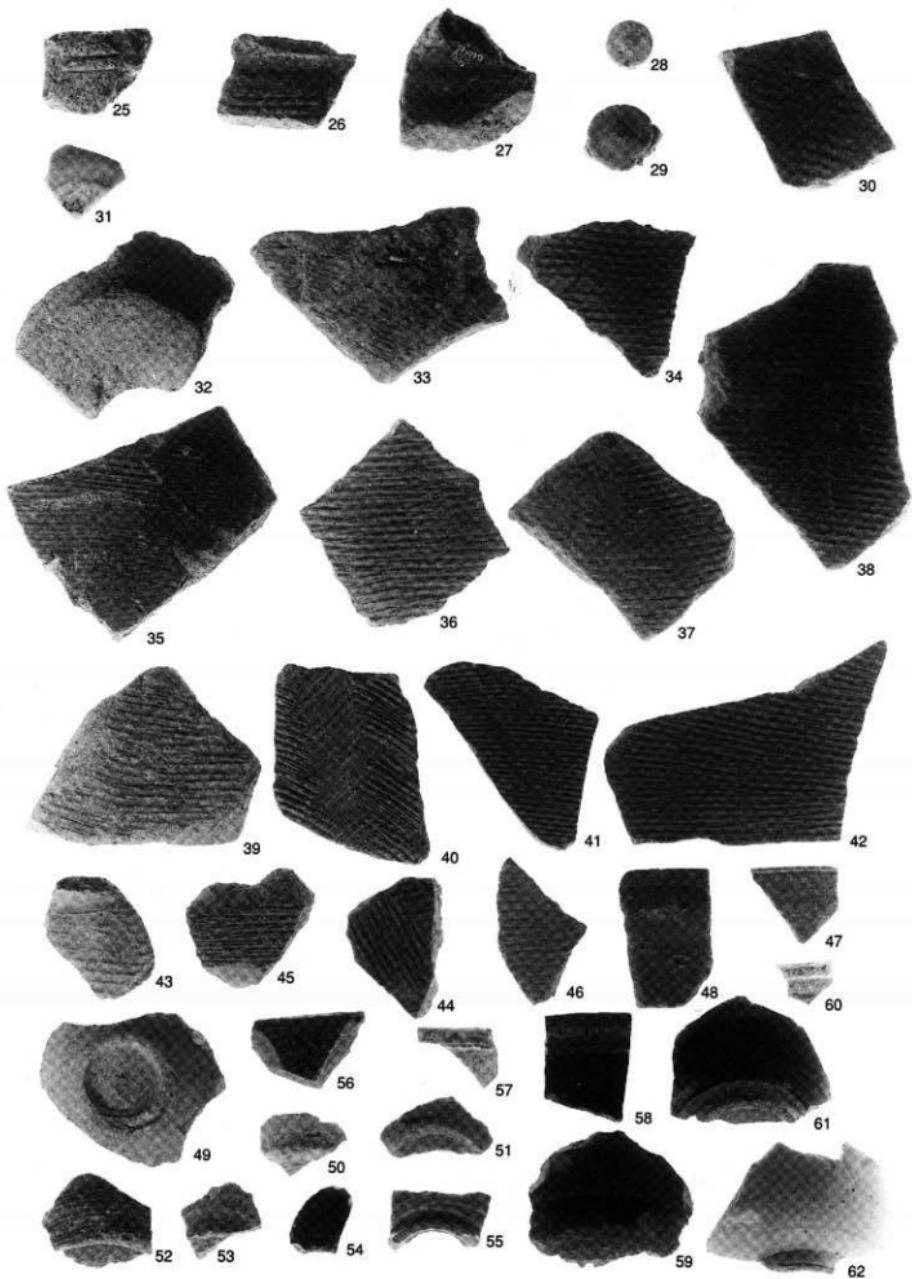
3. THJ-19遺跡  
6. 吉江野遺跡



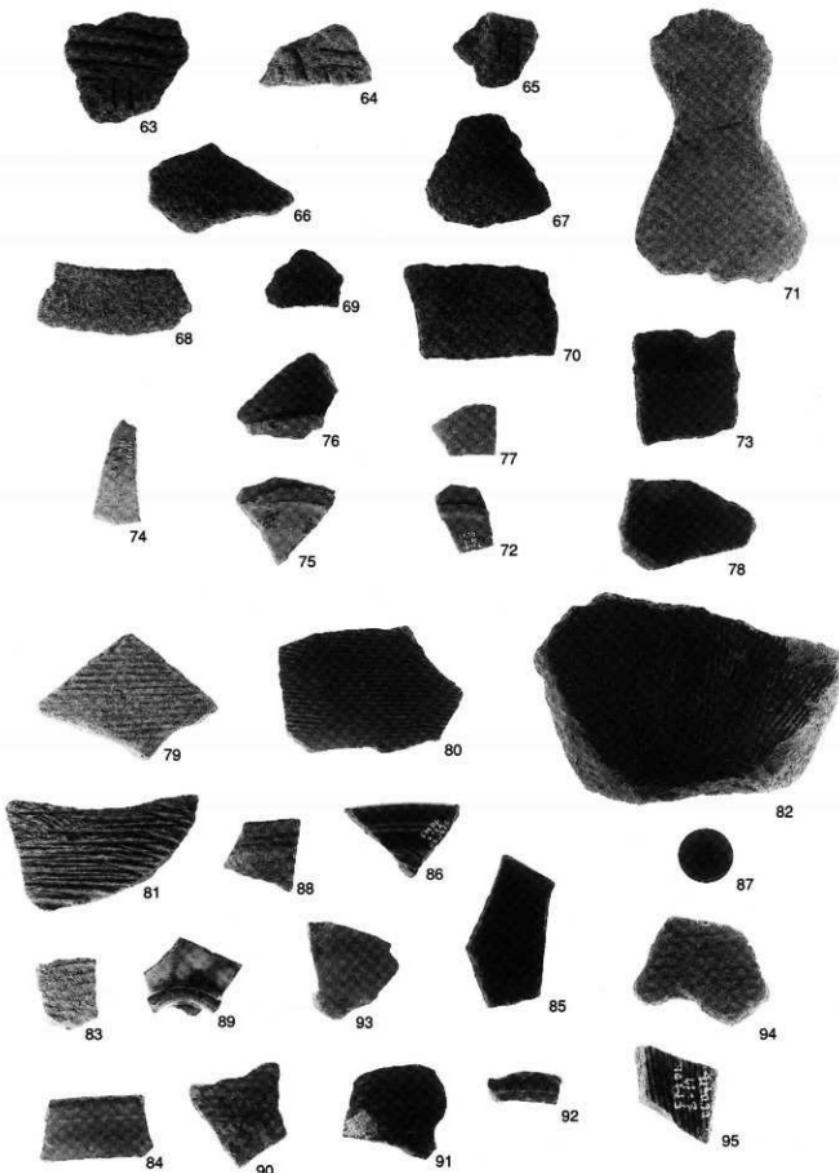
図版4 調査状況



図版5 遺物写真(1)



図版6 遺物写真(2)



図版7 遺物写真(3)

# 報告書抄録

ふりがな	とやまけん なんとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうさはうこくに ふくみつちいきいち							
書名	富山県 南砺市埋蔵文化財分布調査報告2 -福光地域1-							
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書17							
編著者名	高橋浩二 小林高太 高橋彰則 坂上菜美子 坂田裕之 佐藤雄太 高畠郁美 細丸善弘 増永佑介 松木綾子 村上直 横幕真 佐藤聖子 黒崎直							
編集・発行機関	南砺市教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL(0763)23-2014	南砺市教育委員会		〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL(076)445-6195	富山大学人文学部考古学研究室			
発行年月日	西暦2007年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
市内遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	-	36° 36' 31'~34' 38° 25'	136° 136' 52'~54' 30° 15'	20060415 ~ 20060416	-	-
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市内遺跡	-	縄文時代 古代 中世 近世	-	縄文土器、打製石斧 須恵器、土師器 珠洲、越中瀬戸 近世陶磁器		-		

## 南砺市埋蔵文化財分布調査報告2

-福光地域1-

平成19年3月19日

編集 南砺市教育委員会  
発行 富山大学人文学部考古学研究室

印刷 牧印刷株式会社

